

5. ^{123}I -IMP による脳血流シンチグラフィ

星 博昭 溝口 直樹 小沢 美幸
 長町 茂樹 陣之内正史 渡辺 克司
 (宮崎医大・放)
 上田 孝 木下 和夫 (同・脳外)

^{123}I -IMP を用いて脳血流シンチグラフィを行った。対象とした症例は、脳血管障害24例で、 ^{123}I -IMP 1~3 mCi を静注し約15分後より、島津製リング型 ECT 装置 SET-020 にて撮影を行った。ほぼ全例に ^{133}Xe 吸入法による rCBF 測定、X 線 CT 検査も併用した。脳梗塞、破裂脳動脈瘤、TIA、モヤモヤ病の合計19例では、CT 上の病変より広い範囲に血流低下がみられたもの5例、CT で異常なく IMP で血流低下がみられたもの4例、IMP で異常なく CT で病変がみられたもの2例であった。残り8例ではほぼ同一領域に異常がみられ、また ^{133}Xe と IMP はほぼ同様の所見を示した。AVM、脳出血5例では、IMP で病巣の血流欠損像、 ^{133}Xe で脳表の AVM のみに高 rCBF 像がみられた。

6. 振動病における核医学検査

下村 修 広田 嘉久 富口 静二
 高木 善和 辻 明德 古閑 幸則
 松野 博行 宮脇 正行 高橋 睦正
 (熊大・放)
 古嶋 昭博 高本 尚男 (同・中放)
 二塚 信 (同・公衆衛生)

末梢循環障害としてのレイノー現象は振動病の主要症状であるが、われわれはこれに対し、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -in vivo RBC による RI angiography と ^{201}Tl -Cl による scintigraphy を施行した。対象は振動病患者16例と正常2例であり、14例にレイノー現象を認めた。RI angiography では、peak time が遅延する傾向がレイノー現象を有する症例に見られた。 ^{201}Tl イメージによる各手指への集積の程度とレイノー現象の間には有意な相関は認められなかった。さらに、 ^{201}Tl activity の推移についても、レイノー現象を示す手指に特徴的な傾向は認められなかったが、今後も核医学的アプローチは検討されるべきものと思われる。

7. RI-Venography (100 例) の検討

天本 祐平 越智 誠
 (国立長崎中央病院・放)
 内田 象之 (同・外)
 森 宣 (長崎大・放)
 松永 尚文 (長崎原爆病院・放)

昭和55年3月より59年11月までに実施した RI-Venography 100 例について検討した。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HSA 15 mCi を使用。血栓性静脈炎や下肢静脈瘤、癌侵襲、肝部下大静脈閉塞症その他における静脈病変を高率に検出し得た。閉塞性病変では first pass scan において閉塞と副行路が明示された。下肢の静脈瘤は blood pool scan において描出された。血栓性静脈炎で腸骨静脈に閉塞をみたものは約半数を占め、大多数は左であった。下腿の深部静脈については診断困難であった。静脈造影を併せて実施した症例(下肢静脈瘤、血栓性静脈炎、肝部下大静脈閉塞症)において、RI-Venography と造影の所見を対比した。

8. $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ による甲状腺機能検査の検討

山田 宏平 藤沢 弘之 六倉 正英
 加藤 幸雄 菅原 徹雄 中島 彰久
 前田 宏文 芦澤 昭 (大分医大・放)
 千原 宏 船越 猛 春田 隆昌
 新野 順 福岡 藤平 (同・放部)

今回われわれは、 $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ による甲状腺の機能検査およびシンチグラフィを行い、ほぼ均一なシンチグラムを示した80例について検討した。甲状腺疾患の診断に有用な結果を得たので報告する。

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -uptake と甲状腺ホルモン (T_3 , T_4) との関係は、(1) 甲状腺機能亢進症では、 T_3 , T_4 静注20分後での $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -uptake, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -20/5' 比、および R_{20} (甲状腺1 pixel 当たりの放射能) が上昇。(2) 機能低下症では逆に低下。(3) 慢性甲状腺炎は、 T_4 値が低い群では、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -uptake, および R_{20} が正常群より上昇し、 T_4 値が正常に近い群では、それらが低下することがわかった。